

H-5

Stage IV 非小細胞肺癌に対する5日間分割
CBDCA+VP-16 経口療法 (CE療法) の Phase II study
名古屋大学医学部第二内科肺癌研究会

○野田康信、鈴木隆二郎、権田秀雄、谷口博之、
近藤康博、生田順也、渡辺好明、田中 齊、松本修一、
平松哲夫、岩田 勝、鈴木 清、森 智弘、進藤 文、
松本浩平、高木健三

目的: Stage IV 非小細胞肺癌 (IV-NSCLC) に対して、
CBDCA+VP-16 併用の化学療法を行ない、抗腫瘍効果と
安全性について検討した。

対象・方法: PS 0-2、75歳以下、未治療の IV-NSCLC
のうち評価可能病変をもち、十分な肝、腎、肺、骨髓機
能を有する症例を対象とした。化学療法は、CBDCA
100 mg/m² day 1-5, i.v., VP-16 50 mg/m² day 1-14 P.O.
とし、明らかな病勢の進行を認めるまで4-5週毎に少な
くとも2コース以上繰り返した。

結果: 1993年2月から42例が登録され38例が適格
だった。男:女比は26:12、年齢の中央値は65歳。腺癌
27例、扁平上皮癌10例、腺扁平上皮癌1例だった。抗
腫瘍効果は、PRが10例でNC22例、PD4例で奏効率
は26.3%だった。副作用は、grade 3以上の出現は白血球
減少で25例(66%)、血小板減少で23例(61%)、貧血は、
9例(24%)だった。grade 3以上の悪心嘔吐は3例(8%)
に認めた。MSTは7.4月以上で、1年生存率は33%だっ
た。

H-7

進行非小細胞肺癌に対するシスプラチンと
多分割経口エトポシドの個別化併用投与の
第2相試験

名古屋大学第一内科肺癌化学療法グループ

○坂 英雄、南 博信、渡辺 篤、岩田全充、
小松 健、長谷川好規、高木英志、山本雅史、
大宜見辰雄、酒井秀造、下方 薫

【目的】シスプラチン (CDDP) と併用する多分割経
口エトポシド (Etop) の投与日数を白血球数 (WBC) の
最低値が 2,000 /μL となるように各症例毎に個別化
調節する第2相試験を行った。

【対象と方法】確診のある IIIB, IV期非小細胞肺癌、
化学療法の既往がなく、PS 0-2、80歳未満を対象と
した。CDDP 80 mg/m² i.v. を day 1, Etop 75 mg/body
p.o. を day 1 から WBC 2,700 /μL 未満になるまで連日
投与した (最長 day 21 まで)。

【結果】43名が登録、現在評価可能34例、年齢 35-
77歳 (中央値 63)、男/女=19/15, IIIB/IV = 14/20, PS
0/1/2 = 13/18/3, AD/LA/SQ = 27/4/3。Etopの第1コ
ースでの投与日数は10-21日 (中央値 19) で、WBC最低
値は 2,247±259 (Mean±SE) /μL であった。化学療
法施行回数は1-5回 (中央値 2) で、効果はCR 1, PR
14, NC 12, PD 7例で奏効率44%であった。なお50%
生存期間は現在のところ8.6月である。WBCはほぼ
目標最低値をとり、1,000 /μL 未満 (Grade 4) は7
例 (21%) であった。血小板はGrade 3 が1例 (3%) で
Grade 4 はなかった。非血液毒性も軽度であった。

【結論】個別化投与により重篤な骨髓抑制の発症を
減少させる可能性がある。

H-6

局所進行非小細胞肺癌に対する5日間分割
CBDCA + 経口 VP-16 と放射線照射の同時併用療法
名古屋大学医学部第二内科肺癌研究会

○渡辺好明、鈴木隆二郎、田中 齊、谷口博之、
生田順也、近藤康博、松本修一、平松哲夫、進藤 文、
野田康信、権田秀雄、田野正夫、岩田 勝、馬場研二、
高木健三、

目的: 切除不能 III 期非小細胞肺癌に対して、化学療法 (CT)
と胸部放射線照射 (RT) の同時併用を行ない、抗腫瘍効果
と安全性について検討した。

対象・方法: PS 0-2、75歳以下、未治療で評価可能病変を
もち、十分な肝、腎、肺、骨髓機能を有する症例を対象と
した。CT は、CBDCA 80 mg/m² day 1-5, i.v., VP-16 50
mg/m² day 1-14, P.O. とし、2コース以上繰り返した。RT
は第一コース目の CT と同時に開始併用し、1日2Gy で計
50-60 Gy を照射した。照射野は原発巣と同側肺門、縦隔と
した。

結果: 1993年2月から55例が登録された。5例が不適格
であり、50例について検討した。男:女 45:5、年齢 (中
央値) 60歳。腺癌22例、扁平上皮癌25例、その他3
例、IIa 16例、IIb 34例だった。抗腫瘍効果は、CR 2例、
PR 33例、NC 10例、PD 4例で奏効率は70%だった。副
作用は、grade 3以上の出現は白血球減少で26例(52%)、
血小板減少は16例(32%)、貧血は15例(30%)に認めた。
また、grade 3以上の悪心嘔吐は6例(12%)に認めた。
MSTは12.4月以上、1、2年生存率はそれぞれ51%、18%
だった。

H-8

進行非小細胞肺癌(NSCLC)に対するイリノテカン
とエトポシドの併用化療における連続投与の検討

国立がんセンター中央病院内科¹, 研究所薬効試験部²

, 東病院内科³ ○安藤正志、江口研二¹, 新海 哲¹
, 田村友秀¹, 大江裕一郎¹, 山本信之¹, 倉田宝保¹
, 笠井 尚¹, 長島聖二¹, 西條長宏², 大松広伸³
, 久保田馨³, 関根郁夫³, 北条史彦³, 松本武敏³
, 児玉哲郎³, 柿沼龍太郎³, 西脇 裕³

目的 トポイソメラーゼ I と II 阻害剤の相乗効果を狙
ったイリノテカン (C) とエトポシド (E) の併用化療におけ
る連続投与の第 I 相試験。

対象 PS 0-2 で未治療の M1 の NSCLC を対象とし、投与スケ
ジュールは A 群 (C) day 1-3, (E) day 4-6, B 群 (E) day 1-3, (C)
day 4-6 とし、また day 7-17 まで G-CSF 50ug/m² の連日皮
下投与を施行。A, B 群共に (E) を 60mg/m² とし (C) を 40, 60,
80, 100mg/m² と増量する設定とし、A, B 各治療群へは同一
用量において無作為に割付けた。

結果 (C) 40mg/m² において A 群 8 人, B 群 7 人を登録。1コ
ース目の血液毒性は好中球減少が A 群 Grade 4 が 2/8 (持続
4日), B 群で G.3 1/8 (持続2日), G.4 1/8 (持続2日) が認めら
れた。非血液毒性は A 群で G.3 のビリルビン上昇を 1/8 (持続2
日), B 群では G.3 のビリルビン上昇が 1/7 (持続2日) に認められ
た。下痢は A 群では G.3 1/8 (持続2日), B 群では G.3 以上
のものは認められなかった。

結語 腫瘍縮小例も見られ、第2レベルを検討中である。